

▲① サバナの野生動物とキリマンジャロ山(ケニア, 2011年撮影)

►② 北アフリカとサハラ以南のアフリカの自然環境  
(Diercke Weltatlas 2008, ほか)

●地域の考察方法● サハラ砂漠を境として、北アフリカとサハラ以南のアフリカでは、大きく文化が異なる(→ p.229)。一方で、この二つの地域は、アフリカとしてのまとまりをもつ地域もある。この節では、対照的な二つの地域を比較し、共通する一般性や地域の特殊性を考察していこう。



▲③ 北アフリカとサハラ以南のアフリカの範囲 北アフリカは中近東文化が広がる地域、サハラ以南のアフリカは中南アフリカ文化が広がる地域である。

① マダガスカル島も安定陸塊で、長期にわたり大陸と切り離された結果、動植物が独自の進化をとげ、固有種が多い。

## 用語解説

① 地溝帯 ほぼ平行にはしる断層によって形成された谷が長く続く地形。アフリカ大地溝帯はアフリカ大陸がさけ、両側に開きつつある場所である。

② サブサハラアフリカともよばれる。

## ●赤道を軸に南北で対照的な二つの地域の気候と植生

両地域が属するアフリカ大陸の形成はひじょうに古く、そのほとんどが安定陸塊である<sup>①</sup>。大陸の平均高度は約750mで、台地や高原が多く、低地は沿岸部の狭い地域に限られる。北部のアトラス山脈は新期造山帯、南部のドラakensバーグ山脈は古期造山帯である。<sup>(→ p.34)</sup>

大陸の東部から南部にかけて、全長7000kmにも及ぶ大地溝帯<sup>②</sup><sup>(→ p.31)</sup>がはしり、そのさけ目に水が流入して形成されたタンガニーカ湖やマラウイ湖、標高5000m以上の火山であるキリマンジャロ山<sup>(5895m)</sup>がみられる。

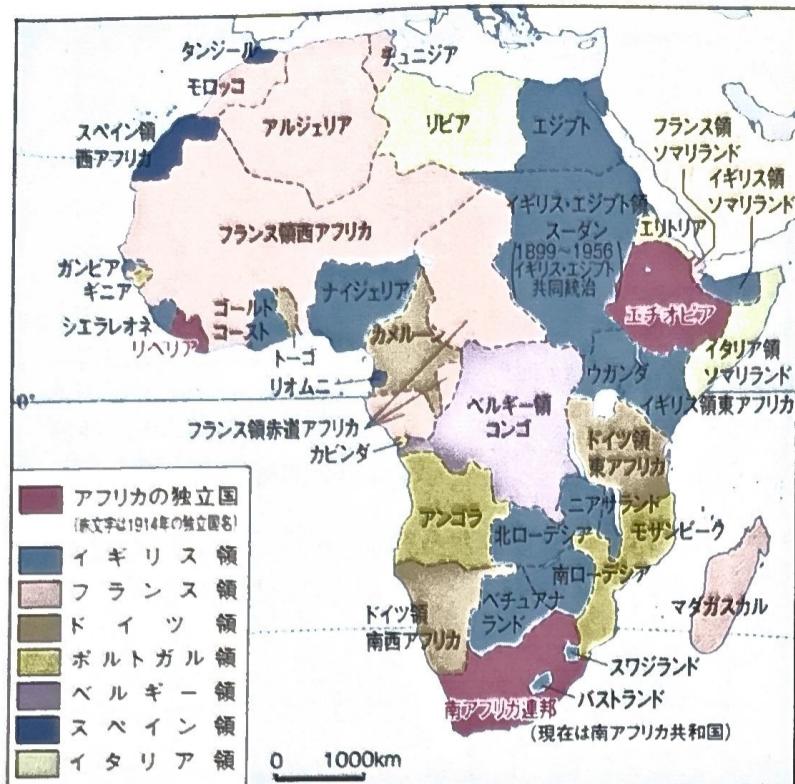
気候帯は、大陸全体でみれば、赤道を軸に南北で対称的に分布するが、北アフリカとサハラ以南のアフリカでは気候や植生の特徴に大きな違いがみられる。北アフリカの地中海沿岸は地中海性気候<sup>③</sup><sup>(→ p.64)</sup>であるが、アトラス山脈を境として、その南側では雨が降らず、世界最大の砂漠であるサハラ砂漠が広がる。<sup>④</sup>ワジもみられ、人の居住できるオアシスが点在する。サハラ砂漠の東部には外来河川である世界最長のナイル川<sup>(6695km)</sup>が南から北へ流れ、流域では灌漑農業がみられる。

サハラ以南のアフリカでは、赤道付近のコンゴ盆地やギニア湾の周辺に熱帯雨林が広がり、赤道から離れるにつれてサバナが、南北の回帰線付近には砂漠が分布する。大陸南部の西岸には寒流のベンゲラ海流が流れ、その沿岸には海岸砂漠であるナミブ砂漠が広がる。<sup>(→ p.55)</sup>

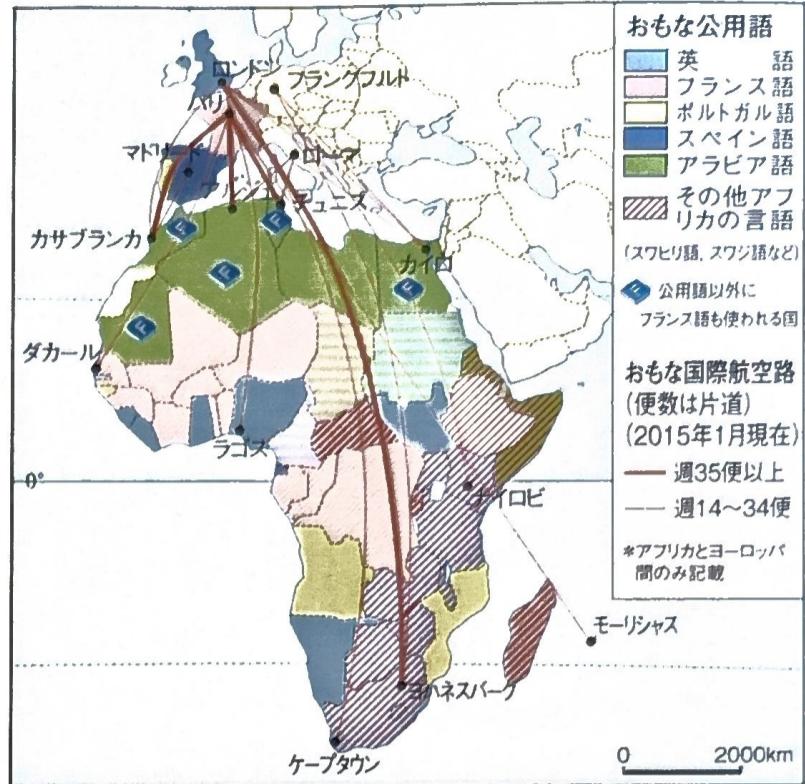
5

10

15



▲④ 1914年のアフリカの植民地分割(Putzger Historischer Weltatlas 2011)



▲⑤ アフリカ諸国のおもな使用言語と航空路の結びつき(OAG Flight Guide 2015, ほか)

## 1 歴史的な背景によって形成された多様な文化

### 植民地支配の歴史と影響

19世紀末までには、両地域のほぼ全域がヨーロッパ諸国の植民地となり、ヨーロッパへの農産物や鉱産資源などの供給地となった。1960年代にはアフリカの多くの国が独立した。独立国の国境線は、植民地時代のものを引きついだ人為的国境が多く、民族の分布を分断することもあり、民族間の対立や内戦を引き起こす原因となった。現在でも旧宗主国との経済・文化面でのつながりが残っている地域が多く、公用語として英語やフランス語などを学び、話す人が多い。また、旧宗主国と結ぶ航空路線が多く、ヨーロッパから多くの観光客が訪れる一方、ロンドンやパリなどにはアフリカ諸国からの移民が数多く暮らしている。

(→ p.214)  
 (→ p.213)  
 (→ p.214)  
 (→ p.214)  
 (→ p.281)

### イスラームの影響を受けた北アフリカの文化

四大文明の一つである古代エジプト文明の時代(紀元前3000年ごろ)から

栄えてきた北アフリカは、歴史的にイスラームの影響下にある時期が長かった。エジプト以外の北アフリカはマグレブ諸国とよばれ、7世紀にアラブ人が来るまで、先住民族のベルベル人が住む地であった。アラビア半島で生まれたイスラームはアラブ人によってマグレブ諸国へもたらされ、アラビア語も普及した。アラビア語は現在、多くの国で公用語となっている。住民の多くはムスリムであり、各地にモスクがみられる。

### リード

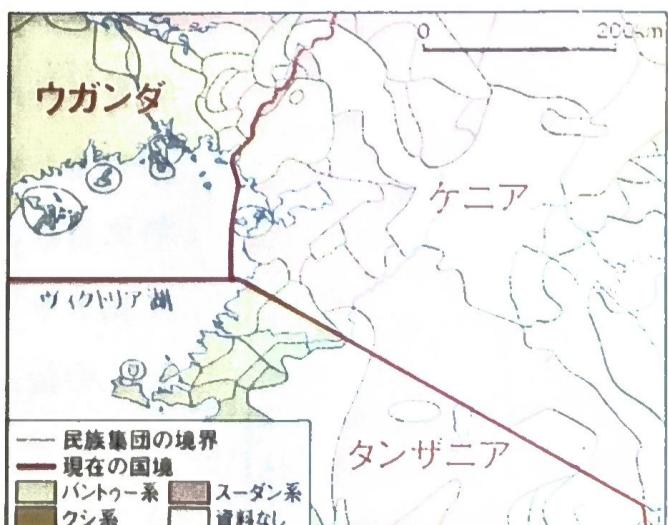
文化が異なる北アフリカとサハラ以南のアフリカでは、歴史や民族の分布にどのような類似点と相違点があるかをみていく。

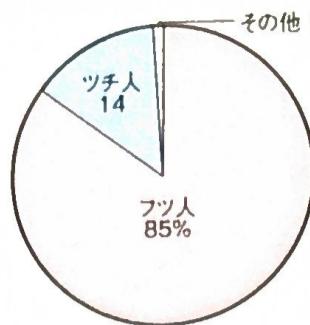
### リンク

さまざまな国境(p.213)  
国家と主権(p.213)

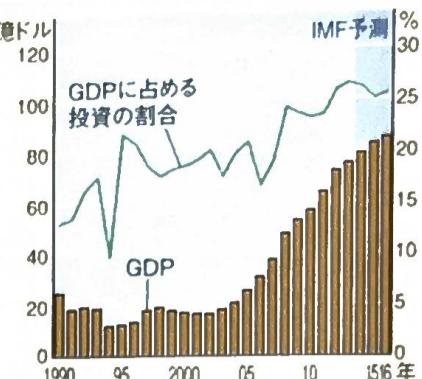
③ アフリカ全域で多くの国が独立を果たした1960年は「アフリカの年」とよばれる(→ p.214)。  
 ④ マグレブとは、アラビア語で「日の沈む地」の意味をもち、チュニジア・アルジェリア・モロッコなどアフリカ北西部の地域の総称となっている。

▼⑤ 民族の境界と一致しない国境(世界民族言語地図) 福民地時代に、緯線や経線などを利用して引かれた国境が多い。





▲② ルワンダの民族構成  
(2002年)(TIME Almanac 2010)



▲③ ルワンダのGDPと投資の占める割合(IMF資料)

◀① 小学校でパソコンに向かう児童(キガリ、2013年撮影)  
小中学校では1人1台のパソコンを配る政策が進められている。

## ●ルワンダの復興と発展

ルワンダでは、少数派で牧畜民のツチ人と多数派で農耕民のフツ人が、長い間共存してきた。第一次世界大戦後にベルギーの支配下に入ると、ツチ人がフツ人を支配する社会構造が強化され、両民族の対立が深まった。そして1994年、フツ人の大統領が暗殺されたことを契機に、フツ人がツチ人の大量虐殺を行った。これに対してツチ人の武装組織が攻勢をかけ、200万人以上が難民となった。  
(→p.221)

その後、ツチ人主体の政権が成立すると、治安の維持と雇用の創出に重点がおかれた。コーヒーや茶の栽培のほか、ソフトウェア開発などのICT産業(→p.137)にも力を入れている。これには、大量虐殺をのがれて外国に散らばった人々が世界各地で技術と知識を身につけて帰国したことが生かされている。今では、ルワンダは高い経済成長率を維持し、「アフリカの奇跡」とよばれている。



年	事項
1910	南アフリカ連邦成立
1948	オランダ系住民(ボーア人)を中心の政権、アパルトヘイト法を制定 ●アパルトヘイト四法 人種別に出生登録を義務づける(人口登録法) 人種によって公共施設の利用を制限(公共施設分離利用法) 人種によって土地所有を制限(土地法) 人種によって居住・営業地域を制限(集団地域法)
1960	ANC(アフリカ民族会議)非合法化
1962	ANC指導者マンデラ逮捕 (国際的非難高まる)
1976	黒人居住区ソウェトで暴動発生
1990	デクラーク大統領がANCを合法化 マンデラ釈放
1991	アパルトヘイト関連法が廃止
1994	マンデラが大統領に就任 全人種平等とする新憲法採択
1996	

▲④ アパルトヘイト廃止への歩み

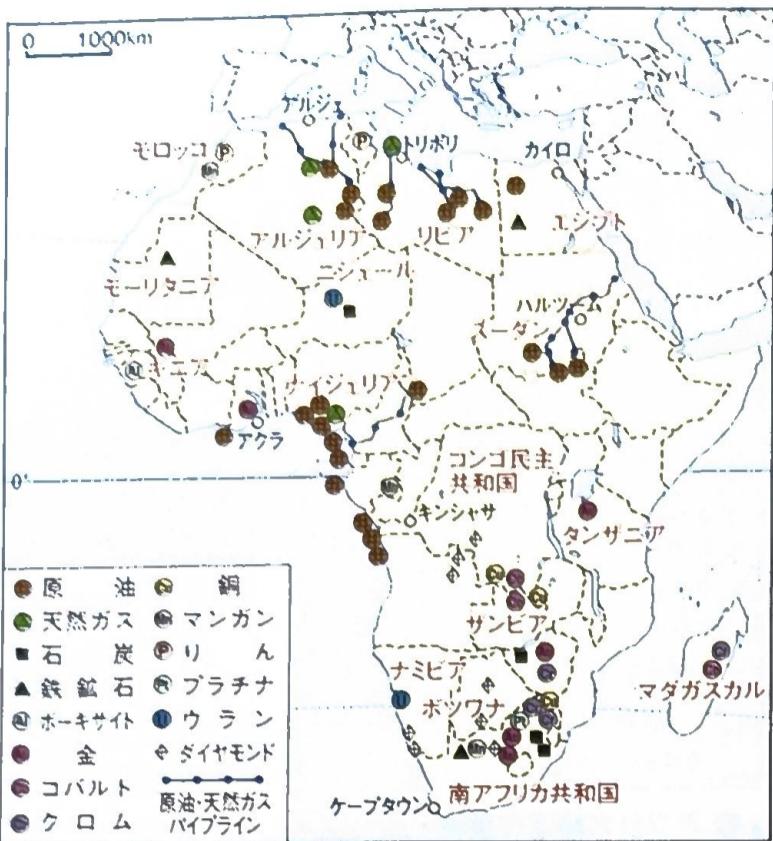
## さまざまな文化が交流する サハラ以南のアフリカ

サハラ以南のアフリカには、古くから独自の文化をもつ王国がいくつも栄え、西アフリカではサハラ砂漠を越える交易路もできた。これを通じてサヘルにイスラームが浸透した。また、東岸ではムスリム商人によるインド洋交易がさかんだったため、現在でもムスリムが多く、アラビア語の影響を受けたスワヒリ語が使われている。15世紀末のヨーロッパ諸国による奴隸貿易の結果、内陸部を中心に労働人口は激減し、経済発展が遅れた。19世紀の末には、ほぼ全域がヨーロッパの植民地になった。多くの国では、各民族が独自の言語をもつため、旧宗主国(→p.271 ⑤)の言語が公用語として使用されている。各地域の祖先崇拜や精霊信仰などとともに、植民地時代の影響でキリスト教が普及した。各国にはさまざまな宗教や人種、民族の人々があり、その対立の解消が課題となっている。

### チェック

- 1) 北アフリカでは、アラビア語が公用語となっているのはなぜだろうか。
- 2) 二つの地域で、旧宗主国(→p.271 ⑤)の言語が使われることが多いのはなぜだろうか。

南アフリカ共和国では、第二次世界大戦後に、有色人種の差別と白人の優遇を柱とする人種隔離政策(アパルトヘイト)がとられていた。しかし、1991年に廃止され、1994年には初めて全国民が参加する総選挙が行われるなど、人種間の平等がめざされている。



▲⑤ アフリカの鉱産資源(Diercke Weltatlas 2008, ほか)

読図 鉱産資源の種類と分布を確認しよう。



▲⑥ リビアの石油精製施設(トリポリ近郊, 2011年撮影)



▲⑦ ボツワナのダイヤモンド鉱山(ハボローネ近郊)

## 2 一次産品への依存が強い産業

### 豊富な 鉱産資源

二つの地域は鉱産資源に恵まれており、経済の大半を鉱産資源の輸出にたよっている国が多い。

多くの油田が分布する北アフリカは、西アジアと並ぶ産油地帯になっている。とくにアルジェリアとリビアはOPECに加盟しており、<sup>⑥</sup>  
<sup>(→ p.129)</sup> 原油と天然ガスが輸出総額の多くを占める。また、エジプトも石油製品や原油の輸出が多く、これらの国々で産出された原油や天然ガスは、欧米諸国へ輸出されている。

サハラ以南のアフリカには、ナイジェリアの原油、ザンビアの銅、<sup>⑦</sup>  
<sup>(→ p.129)</sup> ボツワナやコンゴ民主共和国のダイヤモンド、ギニアのボーキサイトなど、さまざまな鉱産資源が分布し、各国の主要産業となっている。<sup>⑧</sup>  
<sup>(→ p.126)</sup> なかでも南アフリカ共和国は石炭や鉄鉱石、金、ダイヤモンドなど多くの鉱産資源に恵まれている。各国で産出されるコバルトやクロム、プラチナなどのレアメタルは、重要な輸出品となっている。<sup>(→ p.126)</sup>

### 北アフリカの農業と工業

北アフリカの地中海沿岸地域では、夏季に乾燥

に強い柑橘類やぶどう、冬季に雨を利用した小麦などを栽培する地中海式農業が行われている。<sup>(→ p.99)</sup>  
<sup>(→ p.274 ①)</sup> サハラ砂漠周辺では乾燥のため農業はできないが、エジプトではナイル川にアスワンハイダムが完成したことで、広く灌漑農業が可能となった。しかし、下流部のデルタでは、河川の氾濫でもたらされる堆積物や栄養分が減少し、土壤の侵食や塩害による農業生産の低下に悩まされている。<sup>(→ p.63)</sup>

### リード

北アフリカとサハラ以南のアフリカの産業には、どのような類似点と相違点があるだろうか。それぞれの地域を比較しながらみていく。

### リンク

発展途上国の食料問題(p.113)  
鉱産資源の種類と利用(p.124)

ダイヤモンド(2013年) 世界計 1億3048万カラット

ロシア	ボツワナ	エジプト	カナダ	南アフリカ共和国	その他
29.0%	17.7	12.0	9.0	8.1	7.2

南アフリカ共和国 6.2  
その他 28

金(2015年) アメリカ合衆国 3100t

中国	ロシア	カナダ	その他
14.5	9.0	8.1	6.9

南アフリカ共和国 4.7  
その他 47.2

プラチナ族(2014年) アメリカ合衆国 4.1 393t

南アフリカ共和国	ロシア	カナダ
48.4%	30.0	17.5

\*プラチナのほか、パラジウムや  
イリジウムなどを主に  
ジンバブエ 6.6  
その他 3.4

カカオ豆(2016年) ブラジル 4.8 447万t

コートジボワール	ガーナ	ペルー	其他
33.0%	19.2	14.7	16.5

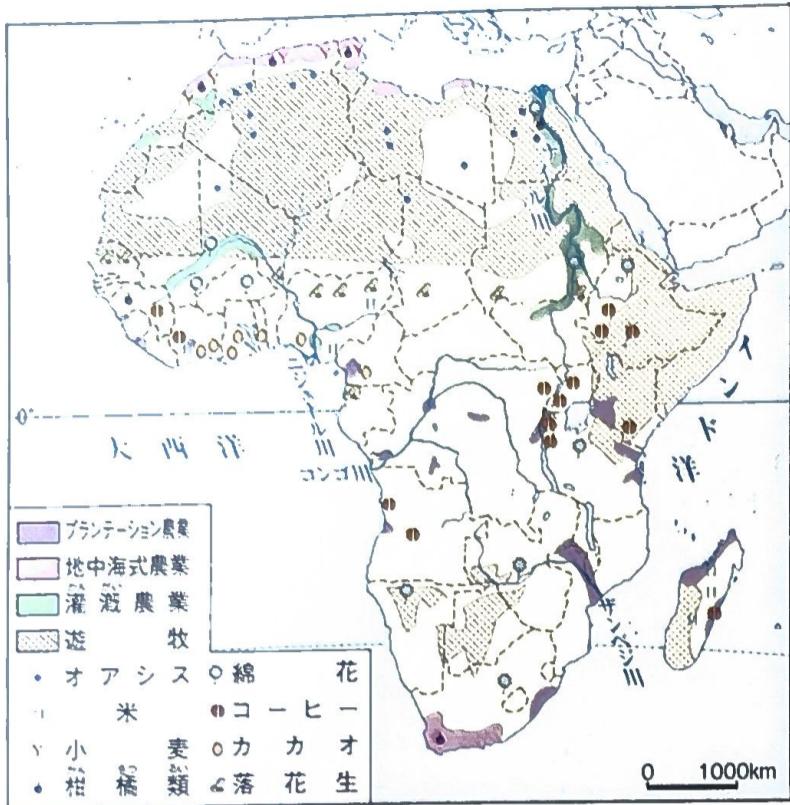
カムルーン 6.5  
その他 16.5

キャッサバ(2016年) 2億7710万t

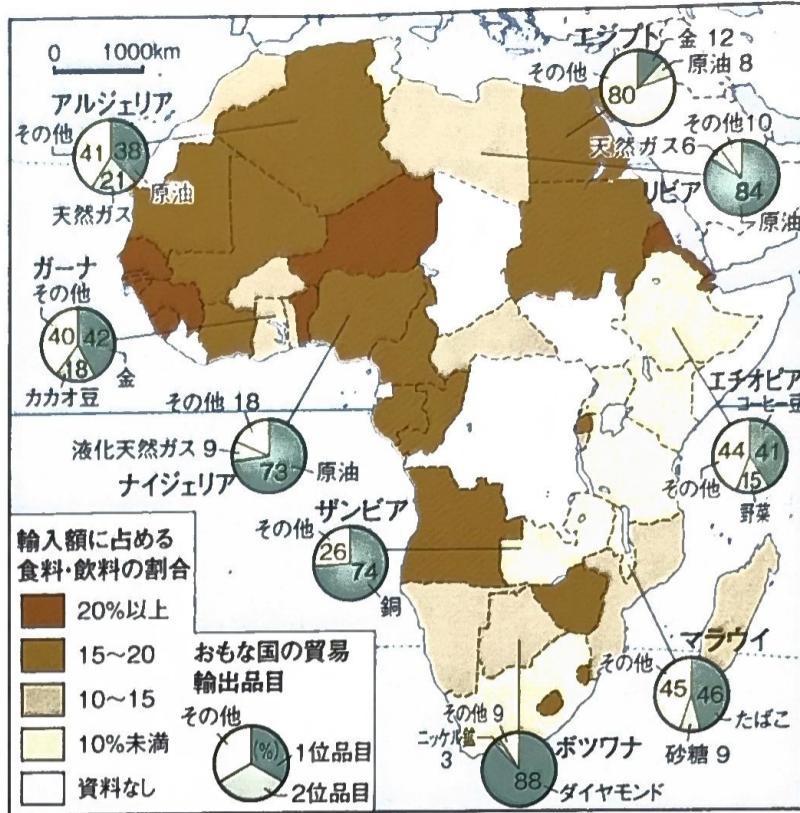
ナイジェリア	タイ	ブルン	カナダ	其他
20.6%	11.2	7.6	5.6	37.4

コンゴ民主共和国 53  
ベトナム 4.0

▲⑧ おもな一次産品の生産  
(Minerals Yearbook, ほか)



▲① アフリカの農業(Diercke Weltatlas 2008, ほか)  
図 p.56 図①の気候とのかかわりを確認しよう。



▲② アフリカ諸国の食料・飲料輸入とモノカルチャー経済  
(おもに 2016 年)(UN Comtrade, ほか)



▲③ オレンジの収穫(チュニジア、チュニス、2013年撮影)



▲④ 収穫したカカオ豆の選定作業(コートジボワール、2012年撮影)

大消費地であるヨーロッパに近いチュニジアやモロッコ、エジプトでは、安い労働力を生かして、衣料、皮革、食品工業などの軽工業が主要な産業となっている。また、電気・機械の部品製造もさかんであり、これらはおもにヨーロッパへ輸出されている。

### モノカルチャー経済の体質をもつサハラ以南のアフリカ

サハラ以南のアフリカには、植民地時代の経済構造に由来し、鉱

産資源や農産物など、特定の一次産品に依存するモノカルチャー経済の傾向が残っている。例えば、ザンビアの輸出額の7割は銅製品。  
(→ p.164)

ナイジェリアの輸出額の7割は原油が占めている。鉱産資源の開発は外国資本の企業に依存することが多いため、地元住民の雇用や所得の向上に結びつかず、逆に紛争やテロの火種、あるいは労働条件の議論に発展することもある。

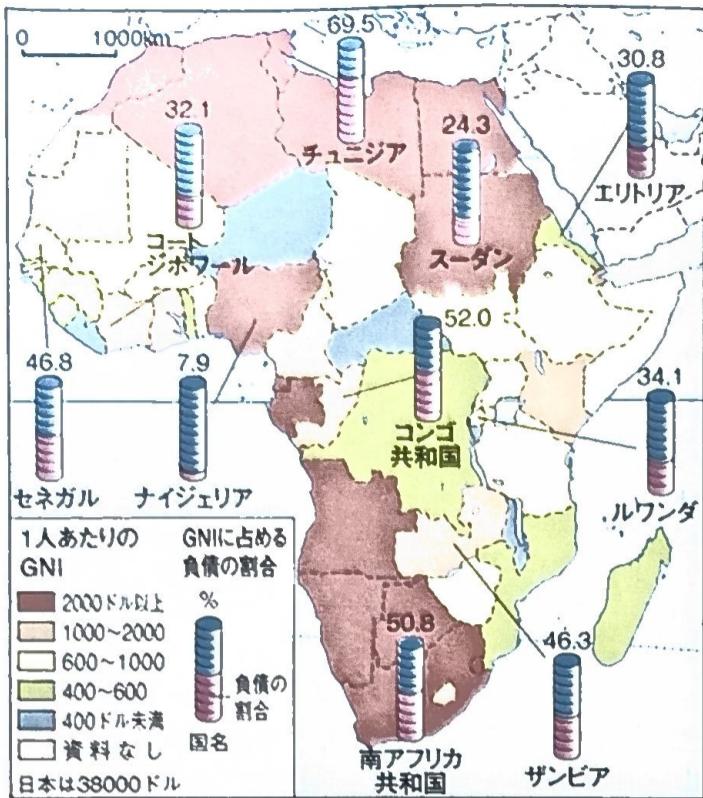
コートジボワールやガーナなどギニア湾岸の国々では、カカオの栽培がさかんで、世界生産の約6割を占める。エチオピアが原産地といわれるコーヒーは、今日もこの国が重要な輸出品となっている。

これらの商品作物の栽培は、小規模農家によってとうもろこしやキャッサバなどの自給作物との混作で行われてきたが、国内での買

い取り価格は低く抑えられ、生産者の収入は安定しない。また、一次産品は加工されずに輸出されることが多いため、生産国の輸出額はのびず、国際価格の変動により貿易収入も安定しない。特定の産物の輸出に依存する一方で、食料生産の増加が人口増加に追いつかず、国内消費に必要な食料を輸入する国が多いのも特徴である。

### チェック

- 1) 北アフリカとサハラ以南のアフリカにおける資源分布の違いを説明しよう。
- 2) サハラ以南のアフリカの産業について、「モノカルチャー経済」の語句を用いて説明しよう。



▲⑥ 高層ビルの建設が進むアンゴラの首都ルアンダの中心部  
(2012年撮影)

◀⑤ 1人あたりの GNI と対外債務(おもに 2016 年)(World Development Indicators Database, ほか)

### 3 人々の生活の変化と他地域との結びつき

#### 新興市場としてのアフリカ

2000 年代以降の農産物や鉱産資源の価格高騰を受け、両地域の経済成長は著しい。とくに、石油資源の豊かなナイジェリアやアンゴラなどでは、都市部を中心に高層ビルやショッピングセンターの建設があいついでいる。多くの国々で携帯電話の利用が急速に普及し、自動車や家電などの耐久消費財の需要ものびている。その成長や人口規模から有望な市場とみなされ、内戦や紛争などのリスクはあるものの、外国企業が積極的に進出し、さらなる市場の拡大と、地域の成長が期待されている。

#### 北アフリカと他地域との結びつき

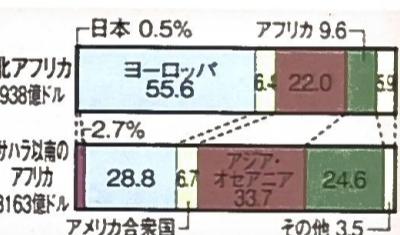
北アフリカ諸国は、石油資源に恵まれ、軽工業が発達するとともに、地中海の温暖な気候を求めて訪れる観光客も多い。地中海をはさんでとなり合っているヨーロッパとの結びつきは強く、主要都市を結ぶ直行便も多い。また、北アフリカからパイプラインによってヨーロッパへ天然ガスを供給するなど、貿易も活発である。(→ p.271)

#### サハラ以南のアフリカが抱える課題と自立への取り組み

サハラ以南のアフリカでは、経済的に自立できず、対外債務を抱える国が多い。国内の貧富の差も大きく、マラリアや HIV、エボラ出血熱など感染症の問題もある。先進国からの支援によって自立への取り組みをめざす一方で、豊かな自然や文化を生かした観光産業や、ICT 産業の振興など新たな産業の発展に取り組み、経済の多角化が進められている。近年では、資源確保の目的から中国の進出が著しく、経済・政治の両面で結びつきが強まりつつある。(→ p.137)

#### リード

北アフリカとサハラ以南のアフリカにおける人々の生活と、他地域との結びつきの変化を、二つの地域を比較しながらみていく。



#### ▲⑦ 北アフリカとサハラ以南のアフリカ諸国との輸出相手国・地域 (2016 年)(UN Comtrade)

\*ここでの北アフリカはアルジェリア、エジプト、リビア、モロッコ、スー丹、チュニジアの合計。サハラ以南のアフリカは上記以外のアフリカ諸国の合計。

#### プラス α

##### 両地域との結びつきを深める中国

中国は、銅の輸出のために内陸国ザンビアとタンザニアを結ぶタンザニア鉄道の建設支援などで築いた友好関係を、近年さらに深めている。中国には銅やレアメタルの輸入という目的があるが、両地域にとっては、安価な中国の輸入品が増えて本国の工業発展が遅れることや、中国人労働者が現地の雇用を奪うことなどの問題が生じている。

#### ✓ チェック

二つの地域における他の地域との結びつきの変化を説明しよう。